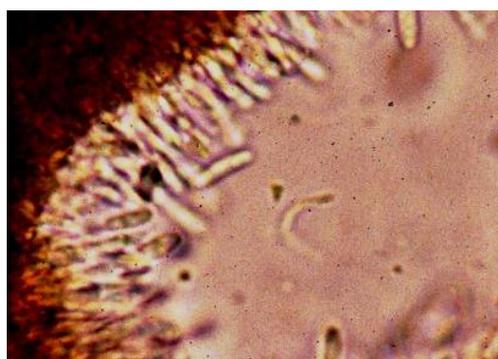


病害診断の現場から—*Phoma* と *Phomopsis*—

タイトルに掲げたのは代表的な植物病原菌の2属です。通常、慣用的に前者はフォーマ、後者はホモプシスと表記されています（フォモプシスと表記したいところです）。「-opsis」というのは「類似を示す接尾語」で生物の和名で良く使われる「-モドキ」のような意味で、この2属はとてもよく似ています。今回は、この2属をどのように見分けているかを簡単に示してみます。



どちらも「分生子殻（柄子殻）」という「壺」のような構造の中に無色、単細胞、楕円形～紡錘形の分生子を形成し、上部の開口部から多量の分生子を放出します。（左写真はイネもみ枯病菌です。）



しかし、*Phomopsis* は楕円形～紡錘形の分生子（ α 孢子）だけでなく針状の分生子（ β 孢子）も作ります。左の写真はナシ胴枯病菌ですが、中央に見えている釣り針のような形のもがそれです。ここで問題なのは β 孢子は必ずしも常に作られていない、ということです。 α ばかりだったり、 α β が混ざっていたり、 β ばかり見えることもあります。 α しか見えない時はどうしましょう？ その時は分生子殻のでき方を見ます。

下の写真は両属の分生子殻形成の特徴をよく表しています、左がトマト実腐病菌（*Phoma* 属菌）で右がナス褐紋病菌（*Phomopsis* 属菌）です。二つの違いがわかりますか？ *Phoma*（左）では個々の分生子殻が球形を保ち、独立散在しているのに対して、*Phomopsis*（右）では、いくつかの分生子殻が多少変形して隣接の分生子殻と密着している点です。この構造を「子座」といいます。菌糸でできたクッション状の組織の上に分生子殻を群生します。*Phoma* は子座を形成しませんが、*Phomopsis* は子座を形成しやすい傾向があります。

